

Volume 219
2016.10,11,12
TAKE FREE

楽しくなる、予感。 

虹の旗

NII no HATA
PRESENTED BY
KYOTO INSTITUTE of
TECHNOLOGY
COOP STUDENT COMMITTEE
PUBLIC RELATIONS DEPARTMENT

特集：ひとりでーとぷらん

【にしのはた】10.11.12月号
2016年10月10日発行 通巻第219号 ■制作 / 京都工芸繊維大学生協学生会広報局 ■発行 / 京都工芸繊維大学生生活協同組合理事会 住所：〒606-0962 京都市左京区松ヶ崎御所海道町 電話：075-781-5859 ■印刷 / 株式会社きかんしユム





いつか誰かと。

虹の旗 Vol.219
2016.10,11,12

CONTENTS

特集

ひとりでーとぷらん

- 03 PROLOGUE
- 05 HITORI DATING
- 14 INFORMATION

HIGHLIGHTS



with YOU ?



あなたはデートと聞くとどのような風景を想像するだろう。
向かい合ってたわいない話をしているだろうか。
はたまた、二人仲良く街を歩いているだろうか。

今回のデートはきっとあなたが想像したものとは全く異なるものだろう。
一般的な意味でのデートとは男女2人で日時を決め、
会うというものなのだから。

今回のデートは題の通り1人でのデートである。
しかしただ孤独に寂しく1人出歩くようなものではない。

どこにでもいる理系男子大学生の少し変わった1日である。

Editor 打谷 拓巳
Photographer 坂根 拓海/下出 大貴/南部 葵/角居 風子/井上 祐輝
Writer 松本 隆洋 Designer 白倉 菜々子

特集：

ひとりでーとぷらん

あ

る朝郵便受けを覗くと、母から水族館のチケットが届いていた。
一緒についていた手紙によると母がもらったものらしい。
しかし、それは無用の長物でしかなかった。

たぶん母は女子と一緒にいくことを期待したのだろうが、残念ながらその期待には応えられなかった。
母のちょっとした気遣いのおかげで自身のリアルが充実していないことを再認識してしまう。
しかし、男友達と二人で魚を見に行ってしまったら、なにか負けた気分になるに違いない。
おそらく水族館のチケットは金券ショップに売られ、どこかのカップルの手に渡っていくのだろう。
明日近くの店を調べて、売りに行こうと決意していた。

ここでふとあることを思い出した。

サークルで知り合った女の子がこんなことをツイートしていた。

「水族館に行きたい」

このようなツイートは元来スルーしていたのだが、今日は良くも悪くも深夜特有のハイテンションであった。

「チケットがあるんだけど、来週に一緒に行かない？」

最近知った彼女の LINE にこのようなメッセージを送ったのだった。

直後、後悔と興奮で布団の上を枕を抱いて転げ回った。

彼女からの返事は心躍るものだった。

喜び勇んで再び布団を転げまわった後、突然不安になった。

本当にデートをしたことのない自分がデートを成功させることができるのだろうか。

彼女との一週間後のデートに備えて、明日は下見にでも行こう。

寝る前に二枚のチケットを封筒から取り出して、少しの間眺めた。

これほど母の気づかいに感謝したのは何年振りかわからない。

LINE のトーク画面を何度も思い出してしまい、眼が冴えてしまって寝付けなかった。



下 見をするためにメモ、財布、携帯を持って午前 11 時に家を出る。松ヶ崎の某学生寮から始まる今日のプランはまず地下鉄で京都駅に行くことから始まる。京都駅にきたのは引越したとき以来だから、おおよそ 1 年半ぶりであろうか。久しぶりの京都駅はあまりに巨大に感じた。

そういえば彼女は大阪から来るらしい。彼女が下りてくるであろう西口の改札に向かった。案内板によると西口には「時の灯」という待ち合わせ場所があるらしい。少し歩けば見えてくるだろうと高をくくっていたのだが 30 分あまり京都駅の中を彷徨った。上京してきたばかりの田舎者のごとき方向感覚の無さに自分自身を嘲笑してしまった。もし当日に直接京都駅に行ったとしたら、きっと大幅な遅刻をしていただろう。目的地に着く前に下見の重要さを深く実感するのだった。ようやくたどり着いた青色に光っているその時計塔の前で改札の方を振り返る。なるほど、ここで待っていたら見つけやすいかもしれない。当日は何時について、どんな風に待っていればいいのか想像してみた。改札から出てくる彼女の姿を想像すると、少しだけ口角が上がってしまった。とりあえず待ち合わせ場所を連絡しておくべきだろう。少しだけ酸っぱい唾をのんで、彼女とのトーク画面を開いた。

事前に地図上で確認していたが、改めて水族館までの道のりを確認しておこう。時計塔から改札に向かって左のほうに歩いて行った。階段を降りると、ペンギンのオブジェが楽しそうに踊っていた。その下の矢印は水族館の方向を示していた。進んでいくにつれて細い道が増えてきた。道順を示す像がところどころにあるので、迷いそうになりながらもかろうじて正しい道を選んでいるようだ。当日は道のりではなく話す内容や歩くスピードに気を配らなければならないだろう。とある先輩が「デートはイニシアチブを取らねばならぬ」と言っていたのを思い出した。その言葉を心に刻んで水族館までの道順を脳裏に焼き付けた。

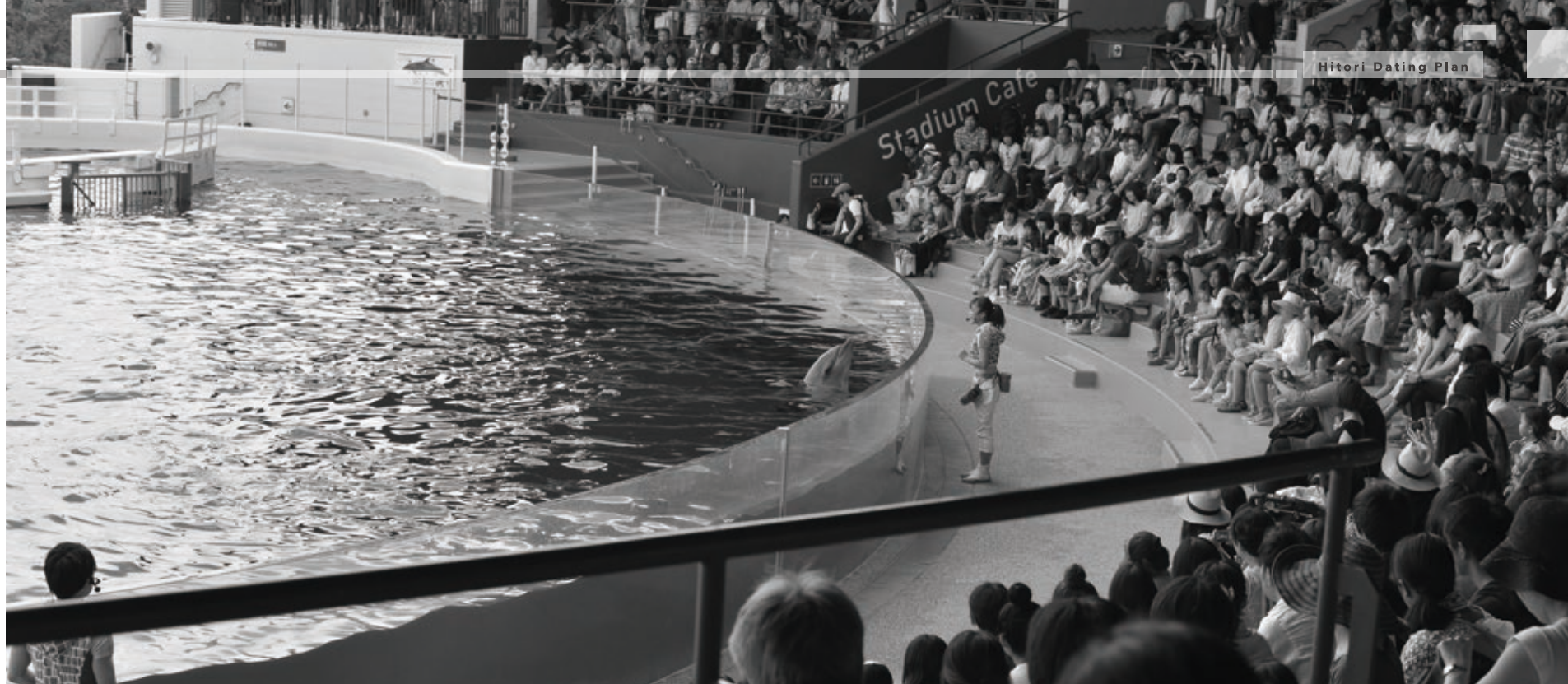
いつの間にか梅小路公園についていた。ここから水族館に行くには道路沿いを歩く道と公園内を通る道の二通りあるようだったが、公園内に案内の像を見つけ、迷わず公園を通った。少し歩くと水族館の看板が見えてきた。

復習するためにここまでの道のりでの注意点をスマホのメモ帳に書きつけるついでに、LINE を確認した。まだ返信はなかった。道中にあったスプリンクラーが火照った体を微かに冷やしてくれた。

水

水族館の中は人であふれていた。チケットを買う列に並んでいる間周りを見渡していると、子供が丸い窓を覗き込んでいた。どうやらイルカの水槽につながっているらしく、運がいいと目の前にイルカが通るらしい。覗いても何も見えなかったが、彼女と来た時に見かけることができたならなどと妄想にふけていた。チケットをもって入場口に向かう途中、イルカショーの時間帯が壁に記されていた。下見の間にイルカショーが行われているのを確認する。イルカショーは水族館でメインとなるイベントだろう。見落としがあってはいけないので何度も念入りに確認した。

水槽では多くの生き物たちが気持ちよさそうに泳いでいた。海獣のエリアに入ると開放感のある空間が広がった。近くにいたカップルはアザラシを見て、かわいい、かわいいと言っていた。二人は共にアザラシの顔を見て、お互いの顔を見て笑った。恋人たちは今日も本当に幸せそうである。嵐のような恋という有名な喩えがあるが、見ている心もまさに嵐のようであった。しかし、心の片隅のほうであんな風に出来たらなあと思っている自分がいた。

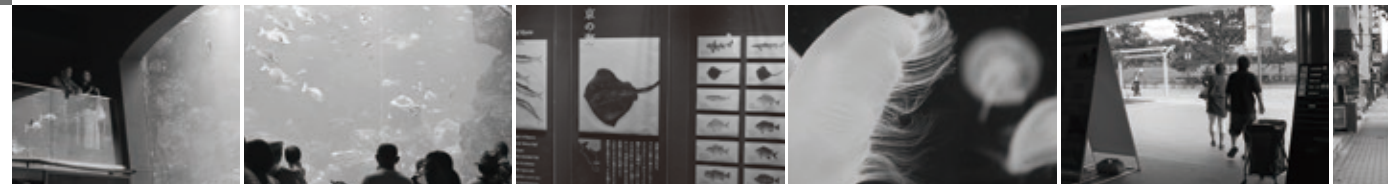


近くにあった海獣カフェという売店で焼きおにぎりを購入した。一つで2個のおにぎりがついていて、海苔がペンギンの形に切られていた。男として、女の子に奢りたいという願望がある。しかし奢ろうとすれば、たぶん彼女は断るだろう。ただ、もしたまたま——2個ついていたらどうだろうか？彼女も素直に受け取ってくれるに違いないし、極めて自然におごることができる我ながら完璧な作戦である。

イルカショーの時間になったので順路とは異なるが迷わず会場に向かった。京都水族館のショーは少し変わっていて、お客さんが全員で入り口付近に配っているストロー笛を吹き、会場全体で盛り上げるものだった。意外に笛を吹くのは難しく、スースーと管の中を風が通り抜けた。何度吹いてみても音は出なかったので、諦めて笛を乱雑にカバンに突っ込む。イルカたちは飛び上がり、合図に合わせて首を振ったり水面から顔を出したりしていた。一連のパフォーマンスが終わり、音楽が鳴りだすとイルカたちは踊った。大勢の中で一人という寂しさをひしひしと感じたが、来週は隣にあの子がいると思うと変にテンションが上がってしまった。

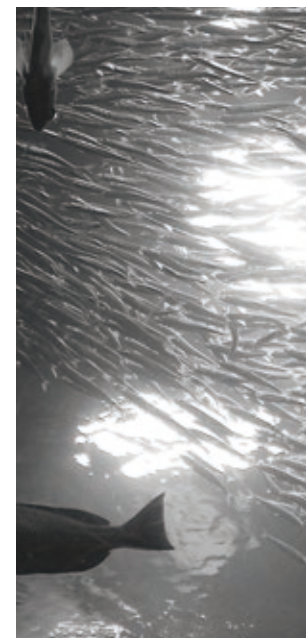


波に押され、一度水族館を出て再入場した。途中でイルカショーに向かった時はこの順路を取った方が賢明だろう。一度見た水槽を通り抜けて大水槽に移動する。目の前いっぱい広がる水槽には多種多様な魚たちがいた。彼らは壁一枚隔てられた青色の中をそれぞれ思いのままに、自由に動いている。大きな塊となった群れが少しずつ形を変える。一匹だけで堂々と泳いでいる魚もいる。ぼんやりと魚を目でたどっていると、突然エイが現れた。白い側をこちらに向けて、顔のように見える鼻孔と口が見えた。いつも間の抜けた顔だと思うのだが、今日は優しく笑っているように見えた。当日、彼女に魚の名前を聞かれたときのために、紹介パネルを撮影しておくことにした。考えれば考えるほど、不安と同時に喜びや待ち遠しさが増していくような気がした。



建物の外に出るとペンギンたちが出迎えてくれた。ペンギンは最も好きな生き物である。今回のデートの下見において、実はイルカショーよりも楽しみにしていた。ガラスの内側の数えきれないほどのペンギンを見て、今回の下見で一番幸せな気持ちになった。ぴよこびよこ歩いているのが、絶妙にかわいらしい。ふとペンギンの姿があの子の姿に重なった気がした。そんなことを考えていると何とも言えず恥ずかしくなってきた。そそくさとその場を後にした。

いくつかの水槽を抜けると、他と雰囲気の違う空間に入った。クラゲのエリアだった。薄暗い中でクラゲたちはその体を透き通らせている。様々な色を持ち、かすかに発光しているその体は幻想的だった。水中をふわふわと漂って、水の中を流されている。クラゲはどこに向かっていのだろうか。小さな体は水槽の中をぐるぐるといつまでも回りつづけていた。





十

産屋を抜けて、水族館を出た。スプリンクラーの下で LINE を開いた。通知が届いていた。深呼吸をして、画面をスライドする。公式アカウントからのお知らせであった。無意識に口から長い息が漏れていた。

このまま帰ってしまうのは流石に味気ない。先輩から聞いた話によると、「落ち着いて話をしたいならばカフェに行けば良い」という。とりあえず先輩から勧められたカフェに行ってみよう。そのカフェの名前は「Cafe Antique」であった。

こんなことを言うのはあまりよくないと思いながらも、道中はどうにも田舎っぽい家ばかりであった。スマホで地図を見ていたが、本当にこの道で合っているのかと不安になる。ぬるい風が耳を掠めた。喫茶店は本当に久々である。以前友達に連れていかれたとき以来であり、当時は自分一人ではとても入れないと思ったものであった。大人になるとうことは案外こういうことなのかもしれない。

数分歩いて、何とか看板を見つけることができた。シックな茶色がかった木でできた入口。メニューが書かれた立て看板が店の前に出されていた。これは……おしゃれすぎではないだろうか。自分ひとりで入れるところではない。ここまで来たものの、勇気が出せずに店の前をうろついた。しかしここで入らなくては下見とは呼べないだろう。財布の中身をしっかりと確認する。意を決して、扉を開けた。窓からは優しく光が差し込んでいた。

メニューと数分間にらめっこした後、注文をするため声をかける。値段は予想していたほど高くなく、とりあえず安堵した。ケーキセットを一つ頼んだ。あまり得意ではなかったが、飲み物はホットコーヒーにした。

そういえば彼女は何が好きだっただろうか。初めて会ってから一年以上たつが、ほとんど彼女のことを知らない。甘いものが好きということはかろうじて把握していた。

コーヒーが静かに運ばれてきた。軽くお礼を言ってから、漂う湯気を鼻から吸い込んだ。とても、いい香りだ。カップに口をつけると、独特の苦みと渋み、甘みが口いっぱいに広がる。コーヒーの熱さが苦みをさらに引き立てる。カップをつけるため、必死に澄ました顔を保っていた。

奮闘していると、ケーキが運ばれてきた。コーヒーの苦さはケーキの甘さで心地よいものになっていた。甘いものは心に幸せを感じさせると思う。ケーキを食べると、いい恰好したくてがんばっている自分が可笑しくなった。



ケーキも残り少なくなってきた。外を眺めながら今日の下見を振り返ってみた。結局、魚の名前はほとんどわからない。笛も一度も鳴らなかった。水族館とカフェまでの道のりも覚えきれていない。今日の下見は本当に意味があったのだろうか、と焦ってきた。落ち着こうと、コーヒーに口をつける。少しだけ冷めて、ぬるくなっていた。

急に机の上のスマホが揺れた。通知が来ていた。彼女からだった。待ち合わせ場所の件だった。少し落ち着いて、LINE を閉じた。スマホを置いてもう一度カップに手をかけると、再びスマホが揺れた。画面を開き、彼女からのメッセージを確認する。思わず顔がほころんだ。

店を出た後でも、ケーキの甘さはいまだに口の中に残っている。この甘さはいつまでも消えないだろう。夕日はアスファルトの上に黄色い光を落とす。いつのまにか当日の心配はしなくなっていた。足を一步、また一步と踏み出して、徐々に増していく風をきる音が耳に心地よく響く。さっきまであんなにぬるく感じていた風が嘘みたいに爽やかで、頬を優しくなでていた。どんなに綿密に計画を立てても、どんな未来が待っているかなんてわからない。それでも、楽しみに思ってしまう自分がいた。

Information



京都水族館

10:00-18:00 年中無休
Tel 075-354-3130



Café Antique

10:00-19:00 火曜定休
Tel 075-755-9049